

【第8号の発刊にあたって】

附属動物実験施設長
芹川忠夫

本号は、附属動物実験施設の平成19年1月から平成20年12月までの研究活動について纏めている。動物実験施設関連委員会、機構図、職員配置については、平成21年1月付けにて掲載している。

前号（第7号）に「京都大学における動物実験の実施に関する規程」を紹介したが、その第24条と第25条に、それぞれ、「自己点検・評価」と「情報公開」が定められている。京都大学のホームページには、平成19年度に実施された「京都大学における動物実験の実施に関する自己点検・評価」の報告書が掲載されているので、本号にも、その報告書を転載させて頂いた。この報告書には、課題としてマニュアルの整備が挙げられている。附属動物実験施設においては、従前より、利用マニュアルを作成して、本動物実験施設の円滑な運営に供してきた。そして、附属動物実験施設のユーザーには、独自のホームページにて閲覧できるようにしていた。自己点検・評価の報告書を受けたこの機会に、内容の見直しを行った。改訂した利用マニュアルはホームページ <http://www.anim.med.kyoto-u.ac.jp/> に掲載したが、印刷体にしておくことも必要と考え、本号に現時点の最新版として掲載することにした。

動物実験施設利用者の研究業績については、平成18年(2006)と平成19年(2007)について纏めているが、基礎系分野等、臨床系分野等を問わず、実験動物を用いた優れた研究の成果が得られている。この活発な研究活動を支える動物実験施設の整備、拡充は、常に求められているところである。数の上では、マウスとラットで90%以上を占めるが、ウサギやミニブタのニーズも高い。また、本動物実験施設が中核機関となって実施している国家事業、ナショナルバイオリソース「ラット」についても、その機能が高められ、国内外からの期待が大きい。平成20年度には、A棟のSPFマウス飼育領域の改修を行ったが、このような状況を踏まえて、近未来を想定した動物実験施設の新たな整備拡充計画を建てる時期にある。ついては、関係各位に、引き続き、ご支援とご協力をお願い申し上げます。